
ハッピースマイル

チラリズム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピースマイル

【Nコード】

N5865B

【作者名】

チラリズム

【あらすじ】

地球そのものである存在の少女の失った笑顔を見るためにピエロに姿を変えた1つの星が少女に笑顔の素晴らしさを伝えます。

人類は悲慘な歴史を残しています。

嘘を嘘で隠したり、自ら命をポイツと捨てたり……哀しきで人の心を染めていく日は近いはず。

我々は何をするべきか？ 裁かれるべきか？
でも。でもね。

いつか、この星が赤く染まろうとも笑顔だけは忘れないように……。

舞台は病室。そこで1人、ベッドに横たわり窓から見える黒い空を見上げている少女がいました。

少女の名前は青土緑【あおとみどり】。長い間ほったらかしたのか、少女の白い髪は伸びに伸び……ベッドから床にまで届いています。

ところで、地球が苦しめば少女も苦しむことをご存知ですか？
少女の病気は治りません、地球そのものが彼女なのです。

哀れな歴史という病に犯されている地球が存在する限り、少女にとっての世界は窓から見えるほんの僅かな景色だけ。

少女は悲しみ、時間とともに感情を無くしていきました。

そんな時です。何も言わずに抱きしめてくれそうな夜空から、頬を優しく撫でるかのように涼しい風に乗る一つの星が少女のもとへ降りてきました。

星はピエロに姿を変えて、少女がいる病室の窓をコンコンと叩きます。

少女は不思議そうな顔で少しためらいながら窓を開けました。

「失礼しますお嬢さん」

「あなたは誰？」

体を捻らせながらピエロにとってあまりに小さすぎた窓に悪戦苦闘、ようやく部屋に入ると……服をパンパンと叩いてからお辞儀をした。

「私の名前はアルトリューグ・ベリアスユングフロウ・ヴィオヴィス・マーシエルグレスディーです」

「長いお名前」

「そうですね。私の親戚は空の彼方まで沢山いますから、カブらないように名前が長いのです。私のことはリューグと呼んでください」

3

「はじめましてリューグ」

「はい、はじめまして……え」と

「青土緑です」

「おやおや素晴らしい名前ですね、どうぞ宜しく」

再びリューグはお辞儀をして、手を差し伸べます。

握手がしたいようです。

『スポッ！』

二人が握手を交わすとリューグの右手が取れてしまいました。

よくある手品を少女に披露したようです。

袖からホンモノの右手を出して、リユージュは少女の反応を見ます。
期待を胸に膨らましていたのも空しく、少女の反応はイマイチのようです。

「面白くなかったようですね、これは残念。自信があつたのに」
少女は首を傾げます。

「どうしてこんなことをするの？ そんな顔ですね……説明しましょう。星たちを代表して私がアナタを笑顔にする使命を果たしに参上しました」

「笑顔に？」

「そのとおり！ 空からアナタを見てみると、いつもいつも無表情の一点張り。見かねた我々が、笑顔の素晴らしさを伝えに参った訳です」

「でも私、笑顔になりたくないわ。静かに過ごして早く病気を治したいの」

「このままでは病気は治りません、その病気が治る薬は笑顔なのですよ」

「本当に？」

「はい」

「でも私、笑いたくない。そんな気分になれないの」

「ご安心を、私はそのために来たのです」

ヒラヒラと蝶が舞うように、リユージュは踊りながら病室を飛び跳ねます。

そしてポケットから力カオのチョコレートを取り出して少女に渡しました。

「お近づきの印にどうぞ、甘くて美味しいですよ」

少女はチョコレートを受け取り、カリッと端の方をかじる。

「……二ガイ」

少女はリユージュに騙されたようです。

「グシシシシ……」

リユージュは口に手をあてて、してやったりと満足そうに笑います。

「リユージュ……ヒドい」

「おや？ これは逆効果のようで……失礼しました。では、これからが本番ですよ」

意気込むリユージュに少女は口を開いた。

「本当に大丈夫？」

「おまかせを、私のレパトリーは数え切れないほどありますからね。幾千の愛の詩も知っていますし、生死をわけた旅の話なども……」

「どれも笑える気がしないかも」

「そりゃ手厳しい」

「ごめんなさい」

病室が一瞬沈黙になる。しかしリユージュはめげません。

「では、ここはシンプルに……」

リユーグは握り拳をパツと開くと、そこから顔を出したのは1本のピンクの花。

その花を両手で包み込む。

再びパツと開くと花は2本現れた。

パチパチと拍手をする少女だが、リユーグはまだまだと首を横に振ります。

同じことを繰り返し、花は4本……8本と倍に増えていく。

すると今度は手で包み隠したままリユーグは少女に尋ねた。

「次は何本だと思いますか？」

「16本？」

「そう、順番通りでいくなら次は16本ですが」

バツと勢いよく両手を開くと、病室いつぱいに花が咲いた。

床や壁、少女が横たわるベッドの隅々まで。

「……すごい」

「グシシ……時は駆け足で待つてはくれない、花たちは余程早く咲きたかったんですね」

今度こそ笑顔が見れるハズ……しかし期待通りにはいきません。

拍手はしてくれるものの少女に笑顔はない。

リユーグは地団太を踏んで悔しがります。

「うるさい！ 病室では静かにしなさい！」

太った看護師の女性がリユーグに怒鳴りつけた。

「うわああ、おっかない！」

リユーグは体の全体をつかって驚きました。

そしてリユーグに部屋の掃除を言いつけて看護師は大きな体を左右に揺らし歩き……部屋から出ていった。

「はじめて見ましたよ、看護師さんが居たんですね」

「あの人は私のことをずっと見守ってくれているオゾンさん、本当は優しい人よ」

少女がそう言うと、再び部屋にヒョコツと顔を出す看護師のオゾン。

「緑ちゃんに余計なことするんじゃないよピエロ」

そう言つてサツサと顔を引っ込め、ズシズシと足音たてて去っていく。

リユーグは離れていくオゾンに向かってアッカンベーをした。

「クスッ」

リユーグが待ちに待った声が微かに聞こえた。

「ヒヤハッ！ 今笑いましたね！？」

「え……私、笑ったの？」

コクコクと必死に頷くリユーグを見て少女は僅かな笑みを浮かべた。

「そう、それです！ 私はそれが見たかったです……少しぎこちないですが、これから自然と笑えるようになりますよ」

『ゴーン！ ゴーン！』

壁に掛かった時計が鳴る。

「あ……時間だ」

「うむむ、なんの時間ですか？」

「私が一周したら報せてくれるの、次の合図がくるまで眠らなきゃ」

「ほほう……つまり1日起きて1日眠ると。それでは私はここで帰ることにしましょうか」

「また来る？」

「もちろん。アナタの笑顔が見足りないので、まだまだ来ますから覚悟してくださいね」

「うん」

二人は堅い握手を交わした。

「いい夢を……」

「覚めない夢って無いのかな……」

少女が急にボソツと呟いた。

「ん？」

「ううん、何でもないよりユーグ」

リユーグは窓から片足を出しながら一度、少女の方を振り返る。

「本当に大丈夫ですか？ 外は真っ暗で怖いです、一緒に居ましょうか？」

「慣れてるから大丈夫だよ、それに暗闇は大切な光の暖かさをくれるから」

それを聞いたリユーグは安心な顔で窓から身を乗り出してジャンプ。

「それでは」

手を降る少女を見てリユーグは風を纏い空の果てへ。

星になって戻って行きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5865b/>

ハッピースマイル

2010年10月26日06時08分発行